

# 日本語における二重構造の示唆するもの

## —日本語話者の〈主観的把握〉と表現性—

守 屋 三千代

### 要 旨

日本語話者は古来より〈主観的把握〉の傾向に基づき、現前の〈見え〉から非現前の〈見え〉を創出する〈見立て〉という表現手法を発展させてきた。〈見立て〉は和歌などの文芸に始まり、次いで視覚表現を中心に日本文化の様々な分野で採用されて、今日に至る。〈見立て〉は現前の〈見え〉と非現前の〈見え〉から成る二重構造を持つ、表現志向的な手法であるが、日本語の文法形式にもこうした二重構造が観察される。その一例が「の」をめぐる認知的構造である。すなわち、「の」も現前の〈見え〉に着目し、そこから推論される非現前の〈見え〉を創出し、同時にそのような非現前の〈見え〉を生じる現前の〈見え〉へと注目を誘導する表現である。

キーワード：認知言語学 主観的把握 現前 非現前 見立て

### 1. はじめに

日本語話者は発話に際して、話し手の周囲にある様々な現象から言語化の対象とする事態を取捨選択し、その事態—〈見え〉—を非分析的・主客合一的に捉える〈主観的把握〉を行う傾向が顕著に観察される。(池上 2000, 2006, 池上・守屋 2009) この傾向に伴い、日本語の発話には話し手や聞き手を客体化せず、独話的に語り出す傾向が見られるとともに、会話構成においては、主観の共有を目指す共同主観的傾向が見られ、終助詞や感動詞などの言語形式として現れる。(池上・守屋 2009)

さらに、日本語話者は主観的に捉えた〈見え〉から新たな〈見え〉を創出する〈見立て〉という表現手法を発展させてきた。〈見立て〉はまず和歌などの文芸に始まり、次に視覚表現を中心に日本文化のあらゆる分野で採用され、現代に至

る日本文化のキーワードである。〈見立て〉には次のような例が挙げられる。

例1. 和歌：冬ながら空より花の散りくるは 雲のあなたは春にやあるらむ

(古今集 330 清原深養父)

「雪」は現前に捉えた〈見え〉、「花（桜）」は筆者が現前の〈見え〉から創出した非現前の〈見え〉である。つまり、今降っている雪を仮想世界の桜の花に見立て、それによって、雪の降ってくる空は花が咲く春なのだろうと表現している。

例2. 命名：「蝦夷富士」：現前の富士山に似た形の羊蹄山を、非現前であり、文化的価値の高い富士山に見立てて命名している。

例3. 命名：「不二山」（本阿弥光悦作 楽焼白片身変茶碗 サンリツ服部美術館所収）：本阿弥光悦作の茶碗。光悦は上半分が白色、下半分が茶褐色という堂々たる茶碗の姿を富士山に見立て、「不二山」という銘を与えている。「不二」には二つとない、という意味も込められている。

例4. 茶道具：瓢花入れ（利休好み）：千利休は数多くの民器を茶道具に見立てて、取り入れた。利休の瓢花入れは瓢のユーモラスな個性を示す上半分を切り落として花入れにしたものである。下半分のみを用いることにより、通常の酒を入れる瓢の姿とは異なる寂びた趣きがある。

例5. 絵画：果蔬涅槃図：伊藤若冲筆。横たわった大根とそれを取りまく野菜の図を、釈尊入滅を描いた「涅槃図」に見立てて描かれている。若冲は、母の死後すぐにこれを描いており、釈尊に見立てられた大根は、禅画の世界では仏のイメージを示す点で、パロディに墮すことなく、芸術作品となっている。

〈見立て〉はいわゆる視覚表現ではない文芸に始まり、その後、視覚に訴える茶道や華道、作庭や絵画などの分野において発達してきた。文芸の場合、語り手はその場に捉えた現前の〈見え〉を取り上げるだけでなく、そこから連想、創出された非現前である表現世界を映像的・視覚的に〈見え〉として語りだす。（例1）この点で、モノ・コトガラ of 命名も同様の過程を辿っている。（例2, 3）これに対し、視覚文化の創作の場合は、逆に非現前の新たな〈見え〉を目標として、それを現前の〈見え〉として具体化するものである。（例4, 5）例3は創作ではあるが、銘である「不二（富士山）」を目指して創作されたわけではなく、そのため、非現前を目指した現前の創作とは言えない。例4は現前を非現前のモノと再認識して用いる点で、後者のグループに入れられる。重要な点は、現前の〈見え〉と非現前の〈見え〉という二重構造を持つものが日本文化に顕著に観察され

るという点と、価値づけされ、創作されたモノ・コトガラが非現前の〈見え〉であるという点、そして非現前の〈見え〉が言語化されるという点である。

では、言語の世界ではこうした二重構造はどのように観察されるのであろうか。これまで筆者は、複合語を中心とする語彙や様態表現を中心とする文法においても〈見立て〉の手法が見られると考えてきた。(池上他 2012, 守屋 2013) しかしながら、複合語の場合は、現前の〈見え〉と創出した非現前の〈見え〉を一語内に並列する構成を取る点で、また文法形式の場合は、〈見立て〉が本来、自由な表現を志向し、現前と非現前との間に発想の差が大きいことを評価するのに対し、推論・判断を志向し、確からしさを主張する点で、文芸や視覚文化との根本的な相違が見られることがわかってきた。

小稿はこうした〈見立て〉との相違を視野に入れながら、「の」の形式を例に、現前と非現前の〈見え〉の現れ方とその表現的な手法を考察する。

なお、小稿で言う「の」は「の」と交替可能である「ん」を含めて指すものとする。

## 2. 先行研究の問題点

日本語の文末の「の」をめぐる研究には、「のだ」をひとまとまりの形式として捉える、説明を加えるという意味に着目する、モダリティという枠組みで捉えるといった傾向が見られる。すなわち、「のだ文」は前提とされるコトガラに対する「説明を表す」(金田一 1955, 久野 1973, 寺村 1984, 奥田 1990)「説明や判断のモダリティ」を表す(益岡 1990)とされている。確かに、

1.A (Bの様子を見て)「元気がないね」

B「頭がすごく痛いんです」

上の会話では、Bの「の(ん)だ」の文は、Aの発言に対する説明となっている。その点で、上記の研究でも取り上げられているように、「の」を文末に含む文は、それに先行する文や事態との関わりを持っていると言えよう。しかしながら、次のような疑問もある。

①. 「のだ」は既に断定の「だ」を伴うため、断定という意味が保証されている。上例は、「だ」を取って次のように言い換えることが可能である。

2.A「元気がないね」

B'「頭がすごく痛いの」

②. 上例を次のように「の」を取っても、ほぼ同様の意味を伝えることができる。

3.A「元気がないね」

B「頭がすごく痛くて…」

すなわち、「の」がなくても「説明」の意味が実現する。ただし、「頭がすごく痛い。」では応答というより、独立して発せられた表出文となる。つまり「の」には、Bのテ形の文と同様、Aの発話にある「元気がない」という指摘とのつながりを持たせる機能がある。

- ③. 「の」は疑問文にも表れ、「説明」の意味になるとは限らない。この点、益岡1990は「説明」と「判断」の二つを立てている。

4.A「どうしたの（ですか）？」

B「頭がすごく痛いの（です）」

Aの文は「どうかしたのですか？」であって、「どうかした（何か問題があった）」という判断を表し、それに「か」を付けて疑問文であることを明確にしている。上昇イントネーションを伴えば、「の」単独で疑問文になる。このように文末が「の」単独で判断と疑問・説明の意味をもって、文を終止することが可能である。

- ④. 「のだ」は「説明のモダリティ」を表すと言われるが、事態の「必然性・可能性・義務性」を問題とする本来のモダリティの意味を考えると、「のだ」をモダリティ形式と呼ぶだけの積極的理由はない。日本語の文法は、西欧語の枠組みを積極的に取り入れてきており、中でもモダリティの概念は拡大解釈され、本来の意味と大幅に食い違っている。（守屋2012）海外の研究者や学習者に対して、理解を図る文法を目指すのであれば、こうした用語は少なくとも厳密に規定する必要がある。
- ⑤. そもそもなぜ日本語には「の」が存在するのか、角田2004は世界でこれに近い形式が見当たらないと指摘するが、そのことは何を示唆するのかを含めて考察する必要がある。

### 3. 「の」における現前の<見え>と非現前の<見え>の二重構造

日本語における「の」の用法について、表現性の高い<見立て>との相違を視野に入れながら、現前と非現前という二重構造という点から考える。

#### 3.1. 考察の観点

- (1) 2をふまえ、「の」単独の機能を考察の対象として、以下の通り考察を進める。
- (2) 先行研究でも指摘されてきたように、「の」を含む文は、それに意味的に関連する先行する文や事態との関わりにおいて現れる。このことを既に認知

された事態を現前の〈見え〉（以下、現前）、これに対して判断された非現前の〈見え〉（以下、非現前）と整理して、「の」の現れ方を考察する。（→ 3.2.）

- (3) 「の」はどのような認知過程で現れるか、推論の過程を視野に入れて考察する。（→ 3.3.）

### 3.2. 「の」の現れ方：現前・非現前の観点より

はじめに、現前と非現前の意味を整理しておく。ここで言う「現前」とは話し手が発話に先行して〈見え〉として捉えている事態—相手の発話や発話の場に来している言語化の対象となる事態—である。これに対し、「非現前」とは現前の事態の様子を手掛かりとして、そこから関連性があると判断される、〈見え〉として捉えられた事態である。例えば、推論される結果や原因や話し手が知識や体験として得ている情報等を意味する。

先に挙げた例で言うと、例 1.A (B の様子を見て) 「元気がないね」 B 「頭がすごく痛いんです」の会話の場合、A の「元気がないね」は、あくまで現前の描写に止めており、二重構造の非現前として「の」を伴っていない。これに応答する B の「頭がすごく痛いんです」という文は、相手が指摘した現前に対して、現前からではわからない話し手の感覚を非現前の事態として、「の」を伴って述べている。仮に A が「元気がないんだね」と言うと、「元気がない」とイマ・ココで見えていることを非現前に置くことになり、話し手が目の前の「元気のなさそうなく見え」とは別の、例えばいつもの様子などの〈見え〉を現前として想定し、非現前の事態としてイマ・ココの〈見え〉を捉えていることを含意する。

上に挙げた「の」の会話例は、いわば現前が隠された事態である非現前を問題にしたものである。このように、「の」は「現前」の意味づけとしての、「非現前」の指標として機能する。すなわち、推論される原因や結果、話し手の事情や過去の体験・本心・常識など、イマ・ココの現前では、窺い知れない〈見え〉を、現前の背後にある非現前として言語化する。言い換えると、「の」は二重構造の語りの装置を提供する。

このように「の」が「非現前」を表すという考え方に近いものは既に次のような研究にも見られる。すなわち、「規定の事柄を表す」(三上 1953, 佐治 1991), 「背景の事情を表す」(田野村 1990) などが挙げられる。小稿は、これらの考えをふまえつつ、日本語話者には現前と非現前という二重構造を取る志向性が見られること、後述するように〈主観的把握〉に基づき、現前への注目を促すこと、さら

にこのことが<見立て>に代表される日本文化と互いに相関的な関係にある認知的行為となっていることに着目したい。(→ 3.3)

### 3.3. 「の」の現れ方：推論過程の観点より

はじめに次例を見られたい。

5. (現前の事態：夫がゴルフクラブを磨いているのを見て)

「明日、ゴルフに行くの？」(守屋 2014)

6. (現前の事態：外から帰ってきた人の傘が濡れているのを見て)

「外は雨が降ってるんだ…」(守屋 2014)

5は、4と同様、話し手が聞き手の現前の状況に着目し、それを非現前の徴候として意味づけをして、「の」の文で尋ねている。つまり、現前を徴候とした非現前の推論を行っている。これに対して6は、話し手が現前の状況を非現前の事態の痕跡として、推論していると考えられる。つまり、「の」は徴候と痕跡の双方に発した推論に出現することがわかる。それでは、「の」はどのような過程を経て現れるのだろうか。小稿は次の3点から考える。

(1) 角田「思考プロセス」(→ 3.3.1.)

(2) パース「アブダクション」(→ 3.3.2.)

(3) 守屋「現前へのフィードバック」(→ 3.3.3.)

#### 3.3.1. 角田「思考プロセス」

角田 2004 は、「のだ」に関する先行研究をふまえ、「のだ」が現れる文には、次のような「思考プロセス」が観察されるとしている。すなわち、

- a) ノダの様々な用法の背景には、人間の「思考プロセス」がある。その「思考プロセス」とは、以下のようなものである。「1. 認識→2. 疑問→3. 推察→4. 答え」
- b) この「思考プロセス」とは、必ずしもすべて文や発話に表れるとは限らない。しかし、ノダ文が出現する際には、「思考プロセス」を想定することができる。
- c) 「1. 認識→2. 疑問→3. 推察→4. 答え」というプロセスは、何回も連鎖することができる。
- d) 「1→2→3→4」の「2. 疑問」のあり方によって、その「思考プロセス」にはレベルの違いもある。
- e) ノダ文が出現するにはプロトタイプの特徴があり、そのプロトタイプに近い

ほどノダ文が出る。

角田 2004 では、次のような例を挙げている。

- |                       |       |
|-----------------------|-------|
| 例 A : 昨日、練習休んだね。      | 1. 認識 |
| どうしたの？                | 2. 疑問 |
| また、さぼったの？             | 3. 推察 |
| B : おなかが痛かったんだよ。      | 4. 答え |
| 例 : あれ、外でみんなの音がする。    | 1. 認識 |
| 日曜日の朝なのに、どうしてだろう。     | 2. 疑問 |
| 何かあるのかな。              | 3. 推察 |
| あっ、今日は町内会でゴミ拾いをするんだっ。 | 4. 答え |

角田 2004 に通じる考え方に、益岡 1991 がある。益岡はノダが「説明」を表すという立場から、「被説明項」と「説明項」が「課題の設定」と呼ぶものを介して、間接的に関係づけられる」とし、「ノダ文」は何らかの課題設定によって出現するとしている。益岡および角田の「思考プロセス」は、話し手の認知が一定の過程を持つことを指摘するものである。この点は、次にあげるアブダクションの考え方にも一部通じる興味深いものであり、妥当な考え方だと思われるが、以下のような疑問もある。

- 1) 「思考プロセス」では「疑問」の存在が大きい。それならば、「の」が持つ「疑問」に関わる機能を積極的に取り上げるべきではないか。
- 2) 「思考プロセス」に着目するのであれば、「ので」の現れ方との関係も視野に入れるべきではないか。
- 3) 角田 2004 は「思考プロセス」は単に「連続する」としているが、連続性は、「の」が非現前の指標であると同時に現前への注目を促すことに由来するのではないか。(→ 3.3.3)

### 3.3.2. パースのアブダクション

アブダクションとは、仮説設定法、仮定演繹法、発想推論、仮説推論などと呼ばれることがある、帰納法 (induction) や演繹法 (deduction) と並ぶ、ギリシヤ時代から思考法、推論法として認められた論法である。C. S. パースは、「あるデータから、それを成り立たせている基盤原理を仮説として導くと、他のデータが上手く説明される場合、その仮説は真であろうと推定する」と定義している。日常、頻繁に行われる推論法である。

アブダクションでは、第一段階として考えている問題の現象に関する説明を推

測し、様々な仮説を挙げ、第二段階では最も蓋然性の高いと思われる仮説を選ぶ。(米盛 1981, 有馬 2001 を参考) 現前から非現前に至る創出と理解の過程, および、〈見立て〉の創出と理解の過程は、〈アブダクション〉の過程に近似すると思われる。

C.S. パースはアブダクションの説明として、次のような例を挙げている。

「わたくしはかつてトルコ領のある港に上陸したことがあった。そして訪問することになっている家まで歩いていくうちに、馬に乗った人に出会った。彼は四人の騎者に囲まれていて、その四人が彼の頭上に天蓋をかかっていた。それほどの榮譽を得る人としてはその領域の総督ぐらいしか考えつかなかったもので、私はこれこそその人物だと推論した。これが仮説である。」(Peirce 1938-57:2.625-Eco (1976) による引用部)

訳者の米盛 1981 は、次のような解説を加えている。

- (1) 説明を要する事実はそれを説明する諸事実から生じる必然の帰結であることを示すこと—いまの例で言うと、ある人がこの地方の知事であれば馬に乗って騎手たちの護衛つきで重んじられてとおるのは当然であり… (略) ということを示すことである。
- (2) 説明仮説は、帰納的確認によって十分支持を得ること—つまりこの地方の知事らしい人について… (略) 最初に仮説を思いついた時点で、われわれが観察した事実のほかに、仮説に関連するあらゆる入手可能な事実を十分観察し、それらの仮説を真と看做すか偽と看做すかを裏づける十分な根拠を示すことである。
- (3) アブダクションは～帰納の性格とはさらにつぎの点で違う。第一に、アブダクションは「われわれが直接観察したものと違う種類の何ものか」を推論する。第二に、アブダクションは「しばしばわれわれにとって直接には観察不可能な何ものか」に到る超越的推論である。

以上からわかることは、アブダクションの推論法は、現前の情報に大きく依拠していること、必要な条件を揃えた推論とは限らないこと、厳密な論理に基づいて真実を追求する態度ではないことである。つまり、我々が日常的に行っている多くの推論である。この点で、角田の思考プロセスもアブダクションに近いものであり、連鎖するのもそれ故であると思われる。

### 3.3.3. 現前へのフィードバックの志向性

日本語話者は、単にアブダクションや思考プロセスを示す指標として「の」を

用いているのであろうか。小稿は次のような点から、イマ・ココの特筆すべき徴候・痕跡としての現前にこだわり、それを伝えるために非現前を持ち出す形式として「の」を捉えたい。

### 3.3.3.1. 現前へのこだわりと「の」が現れる過程

問いと答えに特化して考えれば、思考プロセスに「の」を位置づける考え方は有効である。しかし、「の」は次例のように、現前への注視そのものを求める場合にも用いられる。つまり、現前へのフィードバックを誘導する機能があると考えられる。

7. あなたが好きなんです。

7は自分の思いを「の」を用いて非現前に置いている。この文が「実は・本当に・本当は」といった言葉とともに現れやすいのもそのためである。非現前に置くことによって、隠された本心を告白する、という意味合いが生じるとともに、現前すなわち今自分がこうしてここにいる様子への注目と、主観の共有も求めていると考えられる。つまり、単に「あなたが好きだ」と現前をストレートに言うのと異なる、二重構造の語りとなっている。

### 3.3.3.2. 現前への注目を回避する

「の」は現前にフィードバックさせる機能を持つため、適切に用いる必要がある。次のように「の」を使っても良さそうな場合でも、使えない場合が生じる。

8. 質問、あるんですか？

8は、質問をしたような顔をしている学生に向かって、教師が不審に思って尋ねるような場面の発話である。実際には、たとえそうした顔をしている学生がいても、多くの教員は「質問、ありますか？」と聞くであろう。これは、相手が質問をしたような顔をしているという現前を、あらわにすることを避けるために「の」を使わない例で、結果的に配慮のきいた表現になっている。

次に、110番や119番の応答は「どうしましたか？」であり、「どうしたんですか？」といった「の」を用いた表現は通常は選ばれないようである。例えば、9. 福島市119番応答および10. 千葉県警察本部110番センターによると、次のような対応をすとしてしている。

9. ・119番をダイヤルすると次のように応答します。

・「はい！119番消防です。火事ですか？救急ですか？」「火事です！／救急です！

「場所を教えてください？」場所は、福島市〇〇字△△の□□番地の××です。

- ・火事の場合「何が燃えていますか？」救急の場合「どなたがどうされましたか？」

〇〇が燃えています。△△がケガをしています。

(以下、名前と電話番号、などを聞く)

10. 皆様が110番しますと、千葉県警察本部110番センターの警察官が次の順番でお尋ねします。

- ・「はい、110番千葉県警察です。何がありましたか？」(泥棒・交通事故・けんか・不審者等)「いつ、どこでありましたか？」(発生時間・場所・近くの目標)「どのような事件(事故)ですか？」(被害の状況・怪我の様子等)「犯人はいますか？」(人数・人相・服装・逃走方向等)「あなたのお名前・連絡先は？」(事件事故との関係・住所・電話番号等)

いずれも、現前に大きな事件が出来し、それを正確かつ速やかに伝える必要があるため、事件の詳細を取って非現前におき、謎解きのようなレトリックを持つ二重構造の語りをすることが避けられるのだと思われる。つまり、「の」がない方が事実を冷静に述べる表現となるわけである。

同様に、病院の診察室でも一般に医師は患者に対し「のだ文」を使わないようである。

#### 11. 医師「どうしましたか？」

患者「咳が止まらないんです」

患者は現前の背後にあるものとして非現前を語り、同時に現前への注目も求めるため、自然に「の」を伴って語る。なお、患者が医師と親しい間柄で、いつになく不調な様子で現れたと感じた場合、医師は「今日はどうしたの？」と尋ねるであろう。

## 4. おわりに：「の」の使用に見られる日本語話者の志向性

日本語話者は時として一つの<見え>の表現では物足りないようである。この背後には、話し手も聞き手ともに、一つの事態を確認し合うプロセスを好む、共同主観的な志向性が働いていると考えられる。このことは、視覚文化において判じ物のような命名や暗示的な石庭、言葉少ない和歌や俳句の表現とその効果を考え合わせれば了解できよう。つまり、日本文化とは、理解に向かうプロセスを送り手と受け手がともに味わい、理解・鑑賞に至った実感を、時空間を超えて共

有することを求める文化なのかもしれない。

また、日本人は子どもの頃から、読んだ物語の文字通りの意味の裏を読み込もうとする傾向があるという。(イギリス・スウェーデン・韓国との比較調査に基づく。守屋慶子 1994) これは、日本語話者が現前に対して、決してそのままの意味ではなく、非現前の意味を探り、意味づけする志向性があることを示唆している。日本語研究において、語用論がとりわけ日本で盛んとなった背景も、こうした志向性にあるのではないか。

日本語における「の」は、日本語話者の文化的な発想とも結びついた、現前と非現前から成る二重構造を生みだす認知的行為の現れである。日本語話者はこうした認知的行為を、古来より表現の手法および理解の手法として好みハビトゥスとして習慣化させ、文法にも反映させてきた。今後も文化記号論的研究を目指して、さらに考察を進めたい。

#### 参考文献

- 有馬道子 (2001) 『パースの思想—記号論と認知言語学』岩波書店
- 池上嘉彦 (2000) 『日本語論への招待』講談社
- (2006) 「〈主観的把握〉とは何か」『言語』5月号 pp.20-27 大修館書店
- ・守屋三千代編著 (2009) 『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて—』ひつじ書房
- ・守屋三千代・百留康晴・百留恵美子 (2013) 「〈見立て〉から考える日本語と日本文化の〈相同性〉 比喻との相違を視野に入れて」『日本認知言語学会論文集』第13巻
- 奥田靖雄 (1990) 「説明 (その1)」『ことばの科学』3むぎ書房
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』くろしお出版
- 金田一春彦 (1955) 『日本語. 世界言語概説』下巻 研究社
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中井久夫 (2004) 『徴候・記憶・外傷』みすず書房
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 三上章 (1972:1963) 『現代語法序説—シンタクスの試み』くろしお出版
- 守屋慶子 (1994) 『子どもとファンタジー 絵本による子どもの「自己」の発見』新曜社
- 守屋三千代 (2012) 「日本語教育から「日本語のモダリティ」を考える」『ひつじ意味論講座4 モダリティⅡ: 事例研究』pp.215-232 ひつじ書房
- (2013) 「日本語に見られる見立ての表現」『日本語日本文学』第23号創価大学

—— (2014) 「現前と非現前を結ぶ機能—文末の「の」が示唆するもの」漢日対比語  
言学検討会発表レジュメ 人民大学  
米盛裕二 (1981) 『パースの言語学』 勁草書房

本研究は、科研費（基盤研究 C24500329）による研究である。

（もりやみちよ、文学部教授）

英文タイトル

What the Dual Structure Provides in Japanese Language - from the Viewpoint of  
Subjective Construal and Expression of Japanese Speakers